21世紀の農業 魅力的農業のキーワードは〝ゆとり〟

職業としての農業を考える

長い歴史を持ち、絶え間ない研鑽と技術に支えられてきた農業。勤勉な日本人を象徴してきた農業。その農業が今、新しい時代を迎えようとしています。時代をつくるのは二十一世紀を担う若い人たち。今回は、若者にとって魅力ある農業とは何かを考えます。

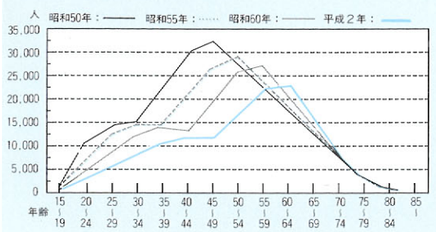
変わりつつある農業観

●農業従事者はだんだん減っている

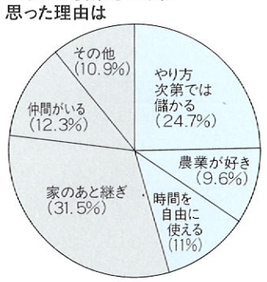
これまでの熊本の農業を支えてきた昭和一ケタ世代もそろそろ六十代。世代交代の時期に差し掛かってきました。わが国は平均寿命の伸びと出生率の低下が重なり、世界に類を見ない早さで高齢化社会を迎えつつあります。特に、農村地域では十年ほど早く高齢化が進んでいると言われています。

一方、その農村では経済優先の風潮、価値観の変化から、農家の跡を継ぐよりも、より安定した所得と就業条件のいい他産業へと転職していく傾向が強まり、「若者の農村離れ」が深刻な問題となってきました。

年齢別農業就業者の推移



新規就農者に対する意識調査
あなたが農業をやろうと思った理由は



●農業の魅力は新3K！

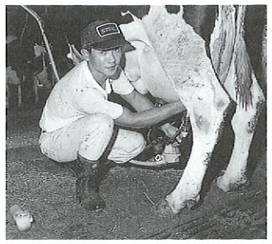
どの産業においても給与、労働時間、休暇は大切な就業条件。農業の場合、所得面では年間一千万円以上の農家が数多く見られるものの、労働時間や休暇の面では、忙しい時とそうでない時のムラがあり、定休日がないのが現状。「〝休暇〟（K）など就業条件がきちんと確立されれば、農業は〝経営力〟（K）としてのやりがいもあるし〝経済力〟（K）もある。大変魅力的な職業になりうる可能性はあるのです」と農政部。

今回は、そんな中で積極的に農業経営に取り組む酪農家の古田正洋さん（七城町）とミカン・施設園芸農家の中尾優子さん（三角町）を取材。二人を通して農業の魅力を探ってみました。

ルポ

酪農を一大企業にする

古田正洋さん



●農場を買い取り法人化

一昨年、古田正洋さん（二七）は父親から乳牛の農場を買い取り、「有限会社サンデーファーム」を設立。給与・休暇・社会保険制度などを確立しました。古田さんは取締役、両親が従業員です。法人化のきっかけは「将来は、乳牛を増やし五人ぐらいを雇って規模を大きくしたい。そのために今から雇用条件を整えておこう」と思ったからでした。

牛への給餌は両親の仕事

●積極的に休暇を取得

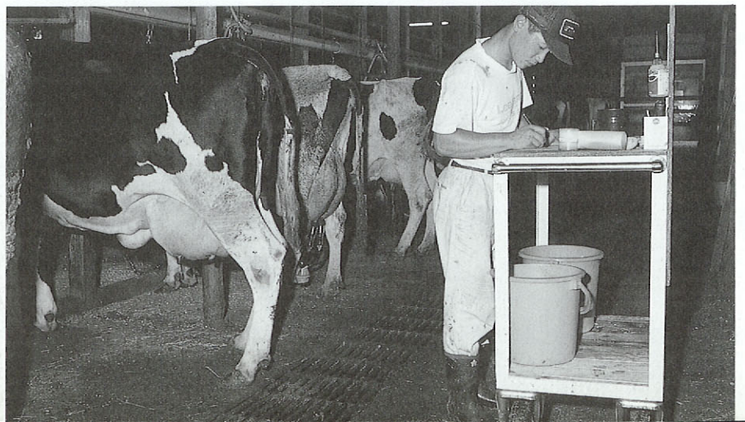
「サンデーファーム」は親子と言えども、タイムカードがあり月二回の休みも徹底しています。それには、古田さんのカナダ研修の経験が生かされているようです。「カナダの酪農家は仕事と余暇をきちんと区別し、アフター5や休日をとても大事にするんです」。しかし、酪農は一日たりとも家を空けられません。古田さんは休むために、「ヘルパー利用組合」から人材を派遣してもらっています。菊池管内には十二人のヘルパーがいますが、利用状況は今一歩。「休みを取るためにヘルパー賃を払うのは、僕は決してもったいないとは思いません」。

しかし、働くことの好きな両親はなかなか休もうとしません。古田さんは「休みの日には酪農をしないように」と言っているのですが、両親は、休みを利用して家庭菜園を楽しんでいます。「趣味で働くのは仕方ないですね（笑）」と古田さん。

●酪農は科学的に

酪農の専門誌を直接アメリカから取り寄せて勉強する古田さん。また、乳牛の検定データに基づいた牛群管理など酪農の新しい取り組みにも積極的です。「〝勘〟は嫌い。仕事の手順や管理方法をマニュアル化すれば人に任せられます」と古田さん。

●異業種からも情報収集

古田さんは酪農の合間に輸入品の販売などもしています。「酪農家以外の人と話すのが楽しい。会社勤めの友人の話も会社運営の参考になります」と異業種からの情報収集にも積極的です。

父親の下で働いていた時は、企業に勤める友人たちが羨ましく、「小遣いが足りないと文句ばかり言っていた」と言う古田さん。今は大変だけど小さな会社の社長。仕事が楽しくて仕方ないそうです。